

第5節 佃遺跡土偶の出土意義と今後の土偶研究

深井明比古

1. 近畿地方での土偶研究

縄文時代祭祀関係遺物に人のかたどった“土偶”が日本列島各地に存在し、東日本出土品を中心に古くから研究されてきた。西日本においては岡山県津雲貝塚〔平井1987〕や、熊本県地方の出土品〔富田1992〕が知られていたが、数量的には東日本のそれには到底およんでいない。近畿地方では直良信夫により発掘された兵庫県神戸市大蔵山遺跡出土土偶〔直良信夫1930〕が初例であり⁽¹⁾、その後に奈良県橿原遺跡〔末永雅雄1958〕において晩期土偶が多数出土した。また第二次世界大戦以降の大規模な開発により、多数の土偶の発見がなされている。

近畿地方出土の土偶を総括的に集成・編年等を論考した、片岡肇〔片岡1983〕、岡崎晋明〔岡崎1992・1995〕、井上蘭子〔井上1993〕などが代表として上げられ、土偶とその情報研究会〔1997〕において西日本各地の土偶集成とともに発生から発展段階そして終焉までの意見の展開がなされた。また近年、発生期と考えられる草創期の土偶が三重県粥見井尻遺跡〔中川1997〕で発見されたのを始め、縄文終末期の晩期突帯文土器から弥生前期にいたる時期の例まで興味ある発見が続いている。

ここでは佃遺跡から発掘された10点の土偶のうち全体像が判る後期の資料3点を改めて紹介し、各地の資料とともにその出自などについて考察する。

2. 佃遺跡の土偶

佃遺跡出土の土偶・土製品は一覧および図に示すように12点の出土をみた。そのうち後期土偶は後期中葉～後葉の土器や骨等を集中的に投棄した傾斜地に堆積した8層や9層から散乱した状態で6個体発見された。その他、晩期前葉～中葉と考えられるものが縄文晩期～弥生前期土器の包含層から1点出土している。

これらのうち後期の所産と考えられる土偶D1は大小9片からなる佃遺跡を代表とする大型の人形土偶である。各破片は一ヶ所に集中して出土したのではなく、8層の上半部を中心に10m×20mの範囲で出土しており、頭部などの上半身が未検出なことからその分布はさらに広範囲にわたるものと考えられる。この土偶は分布範囲が把握可能な資料として土偶廃棄を考慮する際に重要な資料となろう。

佃土偶の後期のものでも、D1・D2・D10は土偶全体を知る手がかりが多く残されている。詳細については各項に詳しいが、概略を記す。

D1は大小9片からなる人形土偶であり、全長27cm前後の大型品である。形状は大きく膨らむ両脚や脚の付け根でくびれ、こんもり膨らむ下腹部からなり、全体は肉体的である。各部に残された弧状文を埋める擬縄文や沈線間をヘラで斜めに刻む文様は後期中葉から後葉の特徴で、その形状から東海地方を中心に出土をみる今朝平タイプ土偶と考えられる。時期は各破片の出土層や位置から後期中葉の元住吉山I式期後半の範疇である。

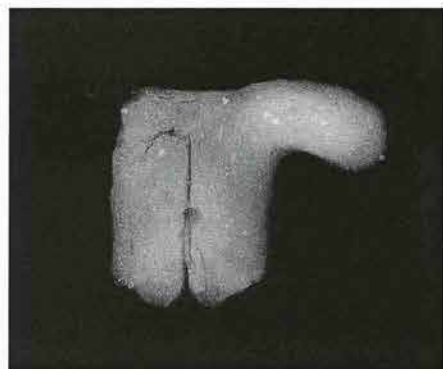
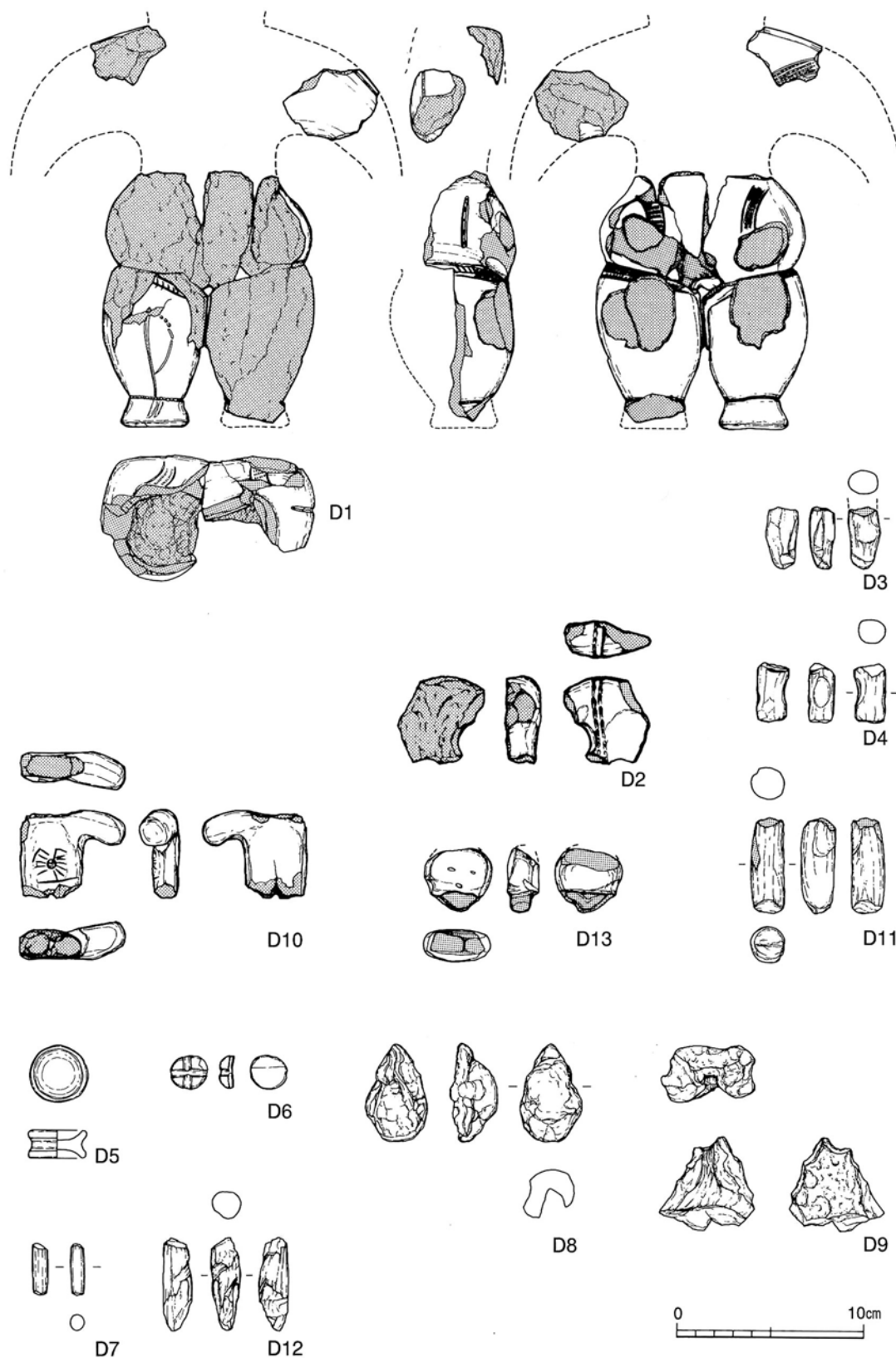


写真2 土偶(D11)レントゲン写真



第18図 佃遺跡土偶・土製品実測図

D2は全長10cm程度の中型の土偶と考えられ、残存部は手先と左半身である。胴部は立体的で肩部及び足の付け根付近は肉厚になり、文様は背面に2条の押引きによる刺突文が施文されている。D1に比べると小型であるが肉体的なもので、出土層位から縄文後期元住吉山I式期後半と考えられる。

D10は頭部などを欠損するが、全長は10cm程度の中型の土偶と考えられる。胴部はほぼ方形で断面は板状を呈する。腕はやや短めで先端が丸くおさまリ、頭部と体部の接合面はソケット状ではない。成形は両脚の断面は明らかに粘土帯2本が確認され、股の亀裂が背中中央に入っていることから、胴部も2束の粘土からなる分割技法によるものと考えられる（写真2参照）。正面には乳房の表現はなく、僅かに腹が膨らむ。腹部中央には“へそ”の刺突があり、そこから右に6本、左に5本のヘラによる沈線を放射状に描き、上方からまわりに短く弧線を描いている。またそれらの下方の脚付け根までの間に水平な沈線を描いている。腹部の“へそ”から放射状に伸びる沈線表現は妊娠線の可能性もあろう。土偶の形態や文様から後期中葉の所産と考えたい。

この他にも縄文後期のものには手足部分と考えられる棒状の破片が存在する。

3. 佃土偶の特徴

本遺跡からの出土後期土偶の中でも最も特徴的なものは最大規模のD1土偶である。この土偶は一見中空土偶のように見える粘土の剥がれがあるが中実土偶であり、その規模と肉体的な形状や弧状を基本とする文様は他を圧倒している。形態や文様からすると岐阜県を発生とする今朝平タイプ土偶と考えられる。肉体的な土偶は東海地方にあり、原田昌幸氏によって今朝平タイプ土偶と呼ばれ〔原田1995〕、伊藤正人氏により4段階の変遷が試みられている〔伊藤1998〕。この土偶は中部地方の山形土偶の影響のもと発生したものと考えられ、近畿地方では三重県天白遺跡〔森川1995〕が知られている。この他、近畿地方中央から西部においてもこの今朝平タイプ土偶に特徴が似るものには次のものがある。大阪府四条畷市の更良岡山遺跡出土の脚部のふくらはぎ表現が明瞭なもの。大阪府箕面市の白鳥遺跡出土の土偶があり、晩期前葉の時期とされるが脚部の膨らみや足首の表現をもつもの。滋賀県近江八幡市後川遺跡でもふくらはぎが特徴の土偶脚部がある。

これらから、近畿各地で出土する肉体的な土偶は今朝平タイプ土偶の可能性がある。

また中四国地方では特に土偶の発見例は少なく、大型品として広島県津雲遺跡例があるが、熊本県を中心に発見される三万田式土偶との関連性も高い。

第37表 佃遺跡土偶・土製品一覧

報告No.	種類	破片数	出土位置	層位	時期	部位	形態	表現・装飾等
D1	土偶	8	南区L20-15.M20.L22.L21-22.L21-23.M20	縄文下層	縄文後期	肩・胴・脚	中実人形	擬縄文・連続刺突文・沈線間斜方刻み
D2	土偶	1	南区N21	縄文下層	縄文後期	胴	中実人形	2列連続刺突
D3	土偶	1	南区K20	縄文下層	縄文後期	左脚?	小型	先端押さえ
D4	土偶	1	南区K20	縄文下層	縄文後期	脚?	小型	上端に弧状沈線
D5	耳飾り	1	南区M20	縄文下層	縄文後期	-	耳栓	端面凹型
D6	装飾品?	1	南区L21	縄文下層	縄文後期	-	円形	表面十字文
D7	棒状品	1	南区M20	縄文下層	縄文後期	-	棒状	
D8	焼成粘土塊	1	南区L20	縄文下層	縄文後期	-	円型	
D9	焼成粘土塊	1	南区N20	縄文下層	縄文後期	-		
D10	土偶	1	北区K14	縄文下層?	縄文後期?	胴・手	板状人形	へそ・放射状文
D11	土偶	1	中央区M17	縄文下層	縄文後期?	脚	棒状	先端および付け根押さえ
D12	棒状品	1	北区N15	縄文上層	縄文晩期?	-	棒状	
D13	土偶	1	南区L20	弥生	縄文晩期	頭	ソケット	目・口

肉体的な人形土偶である三万田式土偶は後期末から晩期初頭の時期にあたり、佃遺跡の後期中葉から後葉と比較すると、東海や近畿より後出するようである。これらの九州熊本から出土する人形土偶は明らかに関東から東海そして近畿と伝搬してきた肉体的土偶（今朝平タイプ土偶）の影響下で成立した土偶であり、その理由として肉体的な人形土偶の初現が東では加曾利B式、東海では後期中葉、近畿では元住吉山Ⅰ式、熊本では三万田式となり、西に伝搬するにしたがい、土器型式も新しくなっていることから判断できる。

長距離間隔の伝搬例としては鳥根県下山遺跡では東北地方の腕を組む屈折像土偶が発見されている。これは製作技法や表現が精緻であり、土偶を見よう見まねで製作したというよりは東北地方の土偶がそのまま持ち込まれた可能性が高いと考えられる。また兵庫県神戸市篠原遺跡では東北地方の大洞式土器が出土し、しかも遮光器土偶片も出土している。これらは製作技法や文様等は東北地方からの搬入品とは言えないまでも、製作技法が酷似する逸品であり、大洞式土器の盛行する地域から搬入された可能性が高い。

後期の肉体的な土偶は西方への伝搬により各地方で同化され、変容しながらさらに伝搬している。これは各地の肉体的土偶が細部にいたっては規格化されていないことから判断できる。

この人形土偶の伝搬する時期は西日本では土器の表面を飾る文様として数千年以上も続いた縄文の使用が極端に少なくなる時期である。縄文文様を捨てざる要因はこの時期の社会変容や環境変化が起因し土偶祭祀に変化が生じた結果ではあろうか。今後の検討課題である。

4. 後期土偶の形態差

佃の後期土偶の中では肉体的な人形土偶のほか、扁平な人形土偶D10が存在する。この土偶については前述のように粘土帯2本による分割技法で、腹部には放射状にのびる特殊な表現がある。この文様表現は近県には類例はなく、遠くは栃木県常見遺跡に腹部に放射状の文様をもつものがある。また愛知県今朝平遺跡の今朝平タイプ土偶の中で腹部中央から左右に平行沈線を2～3条描くものがあり、今朝平タイプ土偶でも古相を示すものと考えられている。いずれにせよこれら東方からの影響を受けた可能性は十分考えられる。

前述の佃遺跡D1は今朝平タイプ土偶であることを述べたが、この特徴的な文様をもつ土偶D10は形状は異なるものの、今朝平タイプ土偶古相の文様影響下で成立した土偶と考えられる。

5. まとめ

佃遺跡での特徴的な土偶は人形土偶D1や腹部にへその表現や放射状に沈線で描かれた文様をもつ小型の人形土偶D10である。これらはいずれも東海地方を初現とする今朝平タイプ土偶の流れをくみ、東方の影響を受け、その影響範囲が東海や近畿東部にとどまらず近畿西部に及んでいたことを物語るものである。しかしこれらの土偶は各地で在地的な様相を示すことから画一的な伝播ではないようである。

他地域の影響を受けた土器としては東北・北陸・関東・東海・九州など全国各地の影響を受けたものが存在する。土偶については東方の影響が濃く、肉体的な人形土偶の最西端資料として確認されると共に、九州西南部から出土する人形土偶との関連性をより一層強くした発見の意義は大きい。

今後は土偶の発生段階やその盛衰、土偶祭祀の実態にせまる資料の増加に期待したい。

(註)

1. 大歳山遺跡出土土偶は前期と報告されているが、近畿地方の現段階の理解では前期土偶は存在が確認されておらず、しかも当時の形態とは合致しないことから、前期土偶であるかどうか疑問視されている。なおこの土偶の所在は不明である。

[参考文献]

- 伊藤正人 1998「今朝平タイプ土偶覚書」『三河考古』第11号
- 泉 拓良 1997「西日本をとりまく土偶基調報告」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 井上満子 1993「西日本の土偶－主にその分類と系統について」『古文化談叢』第29集 九州古文化研究会
- 大野 薫 1997「近畿地方の終末期土偶」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 岡崎晋明 1997「近畿地方の晩期土偶」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 岡崎晋明 1995「近畿地方の土偶について」『関東地方後期の土偶－山形土偶の終焉まで－』土偶シンポジウム 3「土偶とその情報」研究会
- 片岡 肇 1988「近畿地方の土偶について」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』氏論文
- 川合 剛・伊藤正人 1997「東海の中・後期土偶」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 小島孝修・中村健二 1997「近畿地方の中・後期土偶」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 富田紘一 1992「九州の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- 直良信夫 1930「播磨国明石郡垂水村山田大歳山出土の土偶脚部破片」『史前学雑誌』2-2
- 中川 明 1997『三重県埋文センター通信 みえ』No.21三重県埋蔵文化財センター
- 原田昌幸 1995「縄文世界の主な土偶型式とその分布」『日本の美術第345号 土偶』至文堂
- 平井 勝 1987「縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 深井明比古・山本誠・深江英憲 1992「佃遺跡」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県
- 深田 浩 1997「中四国地方の後・晩期土偶について」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 前田清彦 1997「東海地方の晩期土偶」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 三村修次 1992「東南遺跡」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県
- 宮内克己 1997「九州の土偶」『土偶シンポジウム 6 奈良大会西日本をとりまく土偶 発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
- 森川幸雄 1995『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター